

セーターとスキヤキ
私が小学一年生か二年生の頃のことですか
ら、もう五十年近くも昔のことです。秋の終
わりか冬の始めだったと思います。
母と私は駅前商店街へ買い物に出かけま
した。先に行く母の足が洋服店の前で止まり
ました。母は店先に吊るしてあったセーター
をじっと見ていました。どんなセーターだっ
たかは覚えていませんが、白いセーターだっ
たことはなぜか覚えています。
母は長い間そのセーターを見ていました
が、私の手を引き、八百屋さんへ行きました
。買い物を済ませた帰り、母はまた洋服店
の前で立ち止まりました。今度はセーターを
手に取って見ていました。
（早く家に帰って、駄菓子屋さんで買って
らったお菓子を食べたいなあ）
と思いつつ、私は母を待っていました。母
はやっと買う決心をし、店員さんにセーター
を包んでもらいました。

家に帰って母は包装紙をていねいに開け、セーターを取り出し、正座した膝の上に置いてじっと見つめていました。私はお菓子を食べながら、母の様子をうかがっていました。しばらくして母はセーターを元通り包み直しました。

「ちょっと行って来るから、お留守番していてね」

姉たちは遊びに行つたまま、まだ帰つて来ません。一人ぼっちで留守番をするのは嫌でした。

「私も行く！」

母にくつついて行きました。母は再び駅前の商店街へ行き、セーターを買つた洋服店に入つて行きました。

「あの、申し訳ないのですが、このセーター着てみたら、サイズが合わないのです、お返ししたいのですが・・・」

母は店員さんにそう言つて、セーターを返品しました。

（ウソだ。お母ちゃん、セーター着ていないのに・・・）

母がどうしてウソをついてセーターを返品したのかわかりませんでした。その後、母はお肉屋さんへ行って牛肉を買いました。牛肉なんてめったに買わないので、驚きました。母は笑顔で、

「ユミちゃん、今夜はスキヤキだよ」

なんでスキヤキ？お正月でもないのに。今夜はサバの塩焼きにするって言っていたのに。今当時、わが家ではスキヤキはお正月にしか食べられない特別なご馳走でした。八百屋さんへ行って卵や野菜、シラタキを買って、母と私は家に帰りました。家に帰っていた姉たちは「スキヤキ」と聞いて大喜びしました。

父が交通事故で亡くなった時、母は三十二歳でした。姉は六歳と四歳、私は二歳でした。母は実家にたよらず、再婚もせず、生命保険の外交員で生計を立て、女手一つで私たちを

育ててくれました。
家族全員がそろった卓袱台で母はスキヤキ
を始めました。私たち三姉妹はスキヤキ鍋を
じっと見つめていました。母はスキヤキ鍋に
牛脂をひき、肉を入れました。肉が焼けたら
砂糖としょう油を入れました。シラタキや野
菜を入れる前に、母は肉を三姉妹のとり鉢に
一切れづつ入れてくれました。
その肉のおいしいこと!!
母は笑顔で三姉妹を見ていました。
口下手で人見知りだった母にとって、保
険の外交員は辛い仕事だったでしょう。仕事に
追われ、家事に追われ、子育てに追われ、な
りふりかまわず働いて働いて、おしゃれする
心のゆとりもお金のゆとりも無かったでしょ
う。
あの時、店先で白いセーターを見た時、母
はふっとおしゃれしてみたくなかったのでしょ

う。契約が取れてちよっぴりゆとりがあつたのかもしれません。母はさんざん迷った後、思い切ってセーターを買いました。でも、家に帰ってセーターを見ているうちに、自分がおしゃれするより三姉妹にスキヤキを食べさせてやりたいと思ひ直したのでしよう。私は大人になってから、その時のことを母に聞いてみました。―そんなこと、あつたかなあ？―

母は忘れていました。私はスキヤキを食べるたびに思ひ出します。母が正座した膝の上に置いた白いセーターをじつと見つめていた姿を。